

Dr. 和の町医者日記



「認知症の基礎知識」シリーズ③

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。今年もよろしくお願ひ申し上げます。

さて今回は、特に40〜60代の人に読んでほしい内容です。というのも、私のような50代後半が同窓会などで集まると、必ず親の認知症や介護の話題になるからです。友人からも頻りに、親の認知症に関する相談を受けます。外来診療もまるで「認知症外来」になっていきますし、在宅医療においても末期がんは1・5カ月の在宅期間なので、長く関わるのは認知症ばかりです。



長尾和宏 (ながお・かずひろ) 東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る、総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学、東京医科大学客員教授。57歳。

か。

親が物忘れや失敗をするたびに、怒り散らす子供がいます。子供や嫁に何度も怒られた親は、被害妄想が強くなります。子供はなんとかして親を病院に連れて行こうと悩みます。また、親がげげたら「もう人間じゃない。施設に入れなさい」と思いつまむ人もいます。親の「老い」が受け止められないのです。

日本の医療や介護は、子供が決定権を持っていることが多く、私たちが子供には逆らえません。本人は多少ほけても、住み慣れた家で静かに過ごしたいと願っていたとしても、結局は子供の言うことに逆らえませんが。

一方、親の介護を一生懸命やろうとする子供の中には、仕事を犠牲にする人もいます。「介護離職」という言葉は、介護職員が職場を辞めることではありません。親の介護のために子供が仕事を離れることです。

そんな介護離職を減らすことが政府は力を入れていますが、介護保険は家族の介護を前提としているので、介護サービスだけでは親の在宅療養をかなえられない場合があります。そのため、親の介護で悩む子供の世代が増えています。立派な介護施設や高齢者住宅がたくさんできましたが、ありすぎてどこに決めたらいいか迷う人も多くいます。

認知症介護で悩んでいる人は、地元の家族会などに相談す



映画「毎日がアルツハイマー」 関口祐加監督が、認知症の母親との日常生活を描いた映画。長編動画がインターネットの動画サイト「ユーチューブ」に投稿され、40万人に元気と笑顔を届けた。続編の「毎日がアルツハイマー12」では、イギリスでのロケも加わり、認知症のイメージを変えた。

10日は「かいご楽快」へ

ることをお勧めします。そして、来週開催される「かいご楽快」に来て頂ければ、考えが大きく変わるはずですよ。

西宮市のNPO法人「つどい場むらちゃん」は、毎年「かいご学会」という全国大会を主催してきました。認知症の人と介護者を支援する人の集まりです。「か」介護、「い」医療、「ご」近所。今年はい「かいご楽快」と少し漢字を改め、10日の日曜日に阪神西宮駅近くの西宮市民会館アミティホールで開催します。

映画「毎日がアルツハイマー」の上演と、監督を務めた関口祐加さんの講演▽仙台白百合女子大教授の大坂純さんの「制度は幸せを保証するものではない」▽鳥海房枝さんの「死はみな孤独死」▽宅老所「あんき」代表の中矢曉美さんの「理想の施設はできるの？」など、盛りだくさんの内容。もちろん、代表の丸尾多重子さんも登場します。

素晴らしいメンバーが集まるなかで、認知症ケアを学ぶ貴重な機会。詳しくは、つどい場さくらちゃんホームページをご覧ください。イベントに参加できない方は、先月出版された丸尾多重子さんの共著「ボケた家族の愛しかた」(高橋書店)と「親の老いを受け入れる」(ブックマン社)をごらんください。前者は漫画が、後者は写真が多く「とても分かりやすい」と2冊とも好評です。

認知症ケアの現場から